

集団への絵本の読み聞かせに対する保育者の思考に関する研究

Teacher's Conceptions of Reading Picture-Books to Children in a Whole Group Activity.

児童学研究科 児童学専攻 1000-080632 添田 正彦

本研究では、読書を「読み手が文化的道具である本の意味内容に関わること」と包括的に捉える。したがって、読み聞かせと呼ばれる、複数の人の中の誰か一人が声を出して行う集団での絵本を読む行為も読書の 1 形態であると考え、保育の場における集団での絵本の読み聞かせを萌芽的な読書として捉え、それに着目した。そして、「読書に親しむ」という今日の教育課題の 1 つの鍵となる絵本の読み聞かせを、幼児の読書環境に大きくかかわっている保育者はどのように捉えているのか、保育者の読み聞かせに対する考えを行動とともに捉え、明らかにすることを目的とした。

第 1 章

序論

本章では、本研究の位置づけ、絵本の読み聞かせ研究についての概観及び鍵となる概念の定義を行うことを通して、読み聞かせ研究の課題を以下の 6 点として提出した。

- (1) 保育という文脈の中で読み聞かせ活動を全体的に捉える。
- (2) 読み手の意義の認識を捉える。
- (3) 読み手と聞き手の相互作用へ着目する。
- (4) 行動を捉える。
- (5) 集団での読み聞かせにおける保育者の専門性を捉える。
- (6) 読み聞かせのスタイルの多様性を捉える。

これらの課題を踏まえ本研究での目的を以下の 2 点とした。

- (1) 保育者はなぜ絵本の読み聞かせをするのか、また絵本の読み聞かせに関してどのような考えを持っているのか。
- (2) (1) のような保育者の意義の認識や考えは、実際の読み聞かせ行動にどのように反映されているのか。

第 2 章

本調査質問項目の作成

目的：保育の場で経験のある者の絵本の読み聞かせに対する考え方を調査し、その回答から本調査での質問項目を作成することを目的とした。

【予備調査 1】大学生・大学院生への質問紙調査

方法：保育の場で経験のある大学生・大学院生 65 名に対して、自由記述式の質問紙調査を行った。質問項目は以下の 4 項目である。

問 1. 保育現場では、何のために読み聞かせが行われていると思いますか。

問 2. 3～5 歳児に集団で絵本の読み聞かせをすることは子どもにとってどんなよいことがあると思いますか。

問 3. 絵本を選ぶときにどのような基準で選びますか。

問 4. 絵本の読み聞かせ方については、例えば①子どもとやりとりを楽しむ、②絵本のわからないところは説明する、③絵本の文のみ忠実に読む、④その他、などありますが、どのような読み聞かせ方をしていますか。

質問項目問 1 から問 4 について回答を求め、それぞれの質問の回答について大学院生 2 名により、KJ 法を用いた分類を行った。

結果と考察：読み聞かせに対する意義の目的については 28 項目、読み聞かせの良い点 27 項目、絵本の選択基準 37 項目、読み聞かせの方法 30 項目の回答が得られた。得られた回答内容から、保育学生が考える読み聞かせの目的は「想像力や感性を豊かにし、ことばを覚えさせる」とまとめられる。また、読み聞かせの良い点は「感情を共有し、友達と仲良くなるきっかけとなる」とまとめられる。絵本の選択基準は「年齢や季節にあっていて、保育者の伝えたいことが書いてあるもの」とまとめられる。読み聞かせの方法については「やり取りを楽しむ」「登場人物によって声を変える」「絵本の文のみ忠実に読む」などの読み方が考えられている。

【予備調査 2】教職経験者へのインタビュー調査

方法：教職経験者 6 名（現在大学教員で保育現場での教職歴 30 年以上）から読み聞かせに対する考えを調査するため、予備調査 1 と同様の質問項目によるインタビュー調査を行った。

結果と考察：インタビューで得られた回答を文章化し、内容的に類似なものをカテゴリー

としてまとめた。その結果、読み聞かせに対する意義の目的については 17 項目、読み聞かせの良い点 20 項目、絵本の選択基準 25 項目、読み聞かせの方法 20 項目の回答が得られた。得られた回答項目はいずれも多岐にわたり、保育者の読み聞かせに対する考えの多様性が見て取れる結果となった。

以上の予備調査で得られた回答項目から予備的な項目群として質問紙を作成し、調査協力園の担当教諭との協議によって項目表現の修正や不適切な項目の削除を行い、最終的な質問紙を作成した。

最終的に作成した質問紙の内容は以下の 6 つに大別される。

- (1) 保育者・園の読書環境 (7 項目)
- (2) 読み聞かせの目的 (36 項目)
- (3) 読み聞かせの良い点 (34 項目)
- (4) 絵本の選択 (34 項目)
- (5) 読み聞かせ方 (27 項目)
- (6) 絵本観 (18 項目)

第 3 章

保育者の読み聞かせに対する考えの分析【研究 1】

目的：第 2 章において作成した質問紙によって保育者の読み聞かせに対する考え方を明らかにしていく。読み聞かせに対する考え方については次の 4 つの視点から検討を行う。

- (1) 読み聞かせの意義について：①読み聞かせの目的、②読み聞かせの良い点
- (2) 絵本の選択基準について
- (3) 読み聞かせの方法について
- (4) 保育者の絵本観について

方法：保育士・幼稚園教諭 364 名に対して、郵送法または、園に訪問し質問紙調査を実施した。調査対象者には最初にフェイスシートに回答してもらった後、各質問項目に回答してもらった。

フェイスシート項目：「性別、年齢、保育経験年数、現在の役職（担任は何歳児担当かについても記入）、公私立、園の所在地」

質問項目：保育者・園の読書環境についての項目、読み聞かせの目的についての項目、読

み聞かせの良い点についての項目、絵本の選択についての項目、読み聞かせ方についての項目、絵本観についての項目、から構成されている。

結果と考察：調査対象者 364 名中 201 名の回答が得られた（有効回収率 55.2%）。因子分析の結果、読み聞かせの意義は「文字・集中・熟慮」「生活習慣・ルール」「感性・表現」「本好き・楽しむ」「ふれあい・情緒の安定」の 5 因子構造であること、絵本の選択基準は「生活習慣・社会性」「保育者の主観」「リズム・繰り返し」「子どもからの希望」という 4 因子構造、読み聞かせの方法は「やりとり重視」「絵本の世界重視」の 2 因子構造、絵本観は「学び」「空想・感性」「遊び」の 3 因子構造であることが示された。また、保育者の読み聞かせに対する考えには共通する考えと相違の考えがあり、共通の考えは経験年数の上昇とともにその捉え方も強まること、一方、相違の考えは「文字・集中・熟慮」「生活習慣・ルール」という読み聞かせの意義と「やりとり重視」の読み聞かせ方、「学び」の絵本観の間には相関があり、経験年数が上がるにつれ、その捉え方は低くなっていくこと、保育者の担当年齢によって意義の捉え方に違いがあること、その他様々な要因によって絵本の考え方の多様性が生まれていることが予想された。さらに重回帰分析の結果から、絵本観の読み聞かせの意義への影響も示唆された。

第 4 章

読み聞かせに対する考えと実際の読み聞かせ行動との比較【研究 2】

目的：第 3 章において、質問紙調査から保育者の読み聞かせに対する考えを取り出し検討を行った。そこで、そのような保育者の読み聞かせに対する考えは、実際の読み聞かせ行動にどのように反映されるのであろうか。本章では、保育の場における読み聞かせ活動の特徴を明らかにすることを目的とした。具体的には、保育経験年数が違う 2 名の保育者による実際の読み聞かせ行動をビデオ撮影し、両者の読み聞かせの行動と考えの関連を捉えていくこととした。本研究では読み聞かせ活動を「場面への導入」「絵本への導入」「読みの過程」「読後」という 4 つの過程で捉え、そこでの対話に着目し、やりとりの特徴を明らかにする。また質問紙・インタビューによる回答から行動と考えの関連についても検討を行う。

方法：調査対象者は東京都内私立幼稚園及び大阪府内公立幼稚園の保育者 2 名と担当クラスの幼児である。保育者に担任クラス全員への読み聞かせの時間に、普段通りに選択した

絵本を読んでもらった。場面は観察者1名が、担当クラスにおける読み聞かせ活動を、1台のビデオを用い、子どもの後方から保育者を中心にビデオ撮影を録画し記録をとった。保育者に対しては、(1) 幼児に対して初めて読む絵本であること、(2) 読み聞かせ後、保育者に対してインタビューを実施すること、という2点の協力をお願いし、了解を得た。インタビューによる面接では、以下に示す6項目に対して、自由に語ってもらった。

(1) なぜ先生はその絵本を読み聞かせようと思ったのですか。

(2) その絵本とはどのように出会いましたか。

(3) 読む場所、読む体系、読むタイミング(時間帯)などにはどのようなねらいがありますか。

(4) 今回の読み聞かせの導入はどのようなねらいがありましたか。

(5) 今回の読み聞かせの方法はどのようなねらいがありましたか。

(6) 今回の読後はどのようなねらいがありましたか。

結果と考察：各々の保育者に読み聞かせ方の考えはあるものの、実際の読み聞かせ行動は、絵本の内容や特徴によって柔軟に変化することが示唆された。またクラス単位による分析から、両者のやりとりのパターンは次のように考えられる。まず、両者に共通するやりとりのパターンとして地の文に対する幼児の反応には言語的反応は返さず、表情や身振りなどで応じていることが示された。これは、両者ともに選択した絵本が物語絵本であり、「絵本の世界重視」の読み聞かせ方を高く捉えていたため、やりとりのパターンが共通したことが考えられる。次にそれぞれのクラスのやりとりのパターンについて着目する。今回の読み聞かせ活動では「場面への導入」において他の活動が入り、読み聞かせの活動としては曖昧な場面となってしまったため「絵本への導入」「読みの過程」「読後」の3つの場面で捉えることにした。

保育者Aの読み聞かせ活動では18のやりとりが示された。そのうち「絵本への導入」で2(11.1%)、「読みの過程」で15(83.3%)、「読後」で1(5.6%)のやりとりが行われ、「読みの過程」の前後の場面ではほとんどやりとりが行われていなかった。読み聞かせの意義に着目すると、「ふれあい・情緒の安定(2.14)」の意義の捉え方が低く、「感性・表現(4.29)」「本好き・楽しむ(5.00)」の意義を高く捉えている。「ふれあい・情緒の安定」の意義を低く捉えているために「読後」での言語的やりとりが行われず、「感性・表現」「本好き・楽しむ」の意義を高く捉えているために、本の内容を重視し「絵本への導入」での言語的やりとりをせず、幼児が絵本に集中できるように行動したと考えられる。またイン

タビューで、「読後」では「幼児の気づきの発言があったときには言語的やりとりを行う」と回答しているように「読後」の展開の主導者を幼児としている点も、やりとりのパターンに影響していると示唆される。

保育者 B の読み聞かせ活動では、31 のやりとりが示された。そのうち「絵本への導入」で 2 (6.5%)、「読みの過程」で 22 (71.0%)、「読後」で 7 (22.6%) のやりとりが行われ、「絵本への導入」でほとんどやりとりが行われなかったのに対し、「読後」にやりとりが多く行われていた。読み聞かせの意義は保育者 A より、「ふれあい・情緒の安定 (4.00)」が高く捉えられている。そのため「読後」において言語的やりとりが活発となったと予想される。また 3 つの場面すべてにおいて、保育者のやりとりの始発が幼児に比べて多く、活動の展開の主導者はすべての場面で保育者であることが示された。ここからも「読後」の展開の主導者がやりとりのパターンに影響していると示唆される。

第 5 章

総括

以上の結果から本研究では、保育者の読み聞かせに対する考えは、絵本をどう捉えるかという絵本観が読み聞かせの意義に影響し、その絵本観と意義から捉えた考えが、絵本の選択という行動へとつながり、さらにはその絵本に合わせて実際の読み聞かせ方を柔軟に変えていることが指摘された。そして、絵本観は、保育の場においては、保育経験を積むことによって「学び」の絵本観が低くなり、「空想・感性」という絵本観が高まることが示された。このように絵本観は経験、園の環境、担当年齢などのさまざまな要因によって変化していくことが考えられ、その変化が読み聞かせの意義にも影響すると考えられる。

今後は、絵本観がどのように保育者の考えとして構成されるのかを明らかにするため、個人に焦点を当て、保育者の考えの変化や構成を詳細に捉えていくことが課題である。